

第 35 号(2011. 4. 6 配信)

平時の日本で、こんなにもむごい情景を見たことがあったでしょうか。

2011 年(平成 23 年)3 月 11 日午後 2 時半過ぎ、本州の北東部を急激に襲った「東北・関東大地震」、続く大津波の破壊力の物凄さ。マグニチュード 9.0 の凄絶さ。

「サロン便り」に向けて、この一文を書き始めた今は、2 週間を経過した 3 月 26 日です。まだ 2 週間なのか、いやもう 2 週が経ったか、過ぎた時間の感覚さえ不確かに思えてきます。災害をともに受けた被害者の方々も、主にマスメディアの報道・放映で推移と被害をみてきた私たちも、2 週間が経ったというのに、いまだに先が見えない深刻な状況の中にいます。

申し遅れましたが、大災害で亡くなられた 1 万を超える方々に、心からご冥福を祈ります。

一瞬にして大津波に巻き込まれて亡くなった方々、また親愛のご家族を失った方々の無念さ、悲惨さを思うと、何とも言い様のない暗澹たる気持ちになります。

かってない地震の激しさが津波の凄まじさを誘発しました。三陸沿岸、仙台湾内とその周辺、福島県沿岸の惨状は、津波が一気に襲いかかったからでした。阪神大震災(注)と比べようがないのは、犠牲者の人数もともかく、だれが、いつ、どこで、どうなったか、行方がまったく分からなくなった文字通りの不明者が 1 万 7 千人を超える異常さです。

(注)1995 年(平成 7 年)1 月 17 日早朝。マグニチュード 7.3。死者 6,434 人。不明者 3 人など。

備えはあったはずでした。ハザードマップを配布して訓練を重ねた自治体もありました。しかし、大津波は、高さの想定を超え、猛烈なスピードで突進してきました。その状況を映像で見ていると、もはや並大抵の備えでは防ぎ切れないと考えました。27 日の NHKTV は、沿岸・港湾防災 NPO の科学者たちが調査した宮城県南三陸町では、4 階建てのビル、高さ 16 メートルにまで津波が襲ったと、現場の映像と調査者の話を報じました。防災には、これまでの想定や態勢を根本から見直す必要を痛感します。

NHKTV ニュースによると、今度の数波に及ぶ津波で浸水した面積が 470 平方キロ。東京の山手線で囲まれた区域の実に 70 倍に広がり、地盤の沈下で、その 70%が今なお水面にさらされている、と。具体的な数字や映像で示されると、大災害の激甚さが実感をもって胸に迫り、将来の防災に生かしてこそ、犠牲者にこたえる道だと考えます。

災害地の惨状、厳しさ、立ち直りへの希望と期待は、新聞や映像、日々の報道にゆだね、「サロン」と私自身の実体験を記し、アドバイスや参考になる話などを、以下に述べていきたいと思いません。いつ、どこで同様の地震や災難が起きるかもしれない国がらですから。

まず、あの日、あの時刻、皆さんはどこで何をなさっていましたか？ 週末を控えた金曜の午後でしたから、普段と違う動きがあったかもしれません。今後のためにも、時刻の経過と前・後の自身の行動を記憶しておくことを勧めます。東京都内は、幸い大地震の被害を直接受けずに済んだので、この際、冷静に、対応方法を考えることができます。

「サロン」も本社も、普段の業務に当たっていました。が、公共交通機関が不通となり、自宅が近いスタッフを除き、社長以下ほぼ全員が社内で一夜を明かし、翌朝帰宅の途につきました。私自身は、仕事上の友人と午後 2 時半の約束で、都心部(山手線内)の超高層ビル内の喫茶店で会っていました。間もなく大揺れがきました。喫茶店は 1 階、すぐ道路にも出られる。ビルの根元が揺れ

るような、経験がない揺れ方で、誘導された出入り口から、いったん広い大通りの歩道脇に出てみました。二度の揺れがおさまり、周辺の状況と安全を確かめたうえ、そこで初めて注文したコーヒーを口にしました。ほぼ同年の落ち着いた友人で、その後の小一時間、話を済ませて別れたのですが...

大地震に違いないと話し合いましたが、暗黙の同意で、あわてて飛び出したり移動はせず、様子を見て店内の落ち着きに促されたのは正しかったと思います。しかし、地震直後に JR も私鉄も全面ストップしたらしく、駅周辺はごった返し、バスだけが動いていました。

この事態でどうするか？ 運転再開が不明の中で、取りあえずは JR 駅構内の臨時の TV 映像にクギづけとなりました。8 時以降は寒さを避けて最寄りの高層ホテル内のフロアで横になり、超満員の帰宅困難者の仲間入りをしました。夜の外気はまだ冷たい。バスの運行案内は絶えずアナウンスされていましたが、長蛇の列に並んで乗れたとしても、終点から先がまた不明。こういう場合は、動かずに根気よく、暖かい場所を選んで電車の再開を待つのが賢明と、自分の行動は「正解」だったなと振り返っています。

結果を述べれば、午前 0 時に動きだした私鉄の電車に乗るため、急いでホテルを出て、整然と順番を待つ大行列に加わり、押し合いへし合いながらも、午前 2 時半に帰宅できました。対処の要点は、(1) 状況の把握と認識、(2) 体力の温存、(3) 情報に機敏に、の 3 点に絞られましょうか。

友人は、山手線の一駅先のオフィスに立ち寄り、歩き慣れた大通りを歩き、一時間足らずで帰宅できたそうです。季節と時間帯、年齢、体力などにもよりますが、歩いて帰宅できる範囲は、通常は、精々山手線内・外の数駅ほどの道のりでしょう。私は私鉄沿線の郊外在住者なので、一時評判になった帰宅者用マップなどに頼らない方がよい。未知の道を歩くと、思わぬ負担と誤算を起こしかねません。近辺に親族か親友の住まいがあって連絡と相談ができれば、上記の範囲内で一泊させてもらうのもよいけれど。

それにつけても、携帯が使えない時間が長引く事態を考えれば、かつては駅舎の周辺や町中にもあった公衆電話を、常時使えるように備えておくべきです。メールでどうやら代用できればよいが、それもままならない状況下ではなおさらです。

次の話は、流言飛語、つまりデマへの警戒と注意です。数日前の新聞にも、被災地を主にデマわっているとの記事がありました。「外国人の窃盗団がいる」「電気は 10 年間来ない」「暴動がすでに始まっている」など。だれが何のために流すのか、ご用心を。

大災害が起きて一週間後のこと。JICA の農業専門家だった友人から突然電話があり「お元気？」のお尋ねの後、いきなり原発の大事故について「オバマがアメリカに任せるといったのに、菅(首相)が断ったとは、バカだねえ」と。大統領がそんな乱暴なオファーをするはずがないというと、「アメリカは日本より原発の先見性が高いと考えている。菅は任せればいいのだ」。電話での言い合いから、事故処理に悲観論を述べ、出身地の北海道に引っ越そうと思う、とまでいう。私とその直前に TV で聞いた科学者、解説記者の話から、「深刻な事態だから関心をもって注意深く見ている。解決は長引くに違いないよ」というと、「楽観的だねえ」とあざ笑われました。

たまたまその夜、理数科系の別の友人から電話を受け、その話をすると、「ああ、がせネタね。ネットで、がせだってハッキリしてるわよ」との返答。翌日、電話を返してその旨を伝えても「オレは新聞で読んだがなあ。朝日だったか読売だったか」とあやふやに、そしてまた自説の繰り返し。あきれより、デマのせいで、一人の友人を失った思いです。

この話の発端は、東京電力の「福島第一原子力発電所」でした。津波が想定外の高さだったといわれますが、それは東北・関東の太平洋岸の市町村、住民にとってのこと。いわゆる「安全神話」を振りまいてきた東電や歴代政府にとり、「想定外」だったといって免責できるかどうか。私は「否」です。原発は、絶対に安全を守らねばならない。耐震基準は数回改められたかもしれないが、

地震国は、イコール津波国ですから、その責任と立場を考えれば、津波だけは別だとはいえないはず。起きてしまった安全崩壊の深刻な事態には、重大な責任を自覚し直してほしい。原子力安全委員会の知見をもとに科学者、研究者の知恵と工夫を結集して当面する危機を乗り切っていく努力を重ねてほしい。将来までの安全を最大限に配慮し、何十年かけてでも廃炉への事後処理を着実にすすめてほしいものです。

すでに情報の共有を損ない、3月27日までに作業員3名が被爆しました。東電は、原子炉から漏れ出たとみられる水溜まりを知りながら、作業員に周知していなかったことを認め、被爆は「人災」であったことが明らかになっています。

情報の開示、共有は、災害時には特に重要です。東電はもとよりですが、各県、各市町村は、住民の安全確保の上で責任を担っています。当面の危機を乗り切るために、状況・実態の把握 対処方法立案・計画 関係者、住民への周知、分かりやすい説明、という道筋を着実に実行してほしいと強く主張したいと思います。

<お断り> 上述の原文は、3月26～27両日に記述しました。「サロン」では、29日に受信して内容の入力・点検(その時点で正式に「サロン」での記述日を記載します)の後、ホームページ掲載には別の手続きを要します。したがって、配信は4月初旬になると思われます。その間に「大災害」関連の事情、事態の変化があり得ると思われませんが、本文の記事は、26～27日現在の状況につき、あらかじめご了解をお願いいたします。

(3月30日記。国際サブロー)